

# 開催報告：「国際シンポジウム」

宇都宮大学 今泉 繁良

「ジオテキスタイル補強土擁壁の最近の施工例と設計の基準」と題するシンポジウムが、平成8年11月9日（土）に、東京大学生産技術研究所の第一会議室で開催された。

前日が雨天であったこと・開催日が土曜日であること・講師13名のうち11名が外国の講師であり通訳は付かないことなどの不安材料があったが、聴講者97名（一般71名、法人20名、学生6名）に講師・司会の先生（表参照）、会場係の東大院生を含め約130名が参加する盛大なシンポジウムとなった。

シンポジウムは午前中に「ケース・ヒストリー」に関する5講演、午後に「実験と材料」に関する5講演と「解析」に関する3講演が、3つのセッションに分かれて実施された。講演は各20分間行われ、各講演後参加者のために日本語による簡単な内容紹介も行われた（第1セッションは赤木先生、第2セッションは古関先生、第3セッションは龍岡先生）。

各セッション毎に討議時間がもたらされた。主な討議は、動的問題に取り組むとき変形（ひずみ）・力（応力）・加速度のいずれに着目して計測や解析を行うべきか、震動により地表面に発生するクラックを防止する方法、スチールの設計寿命の取り方、クリープを考慮した安全率の問題、擁壁底部での鉛直応力の分布状況、ジオシンセティック・チューブの安全率等について行われた。シンポジウムは予定時間を30分延長して、18時30分まで行われた。

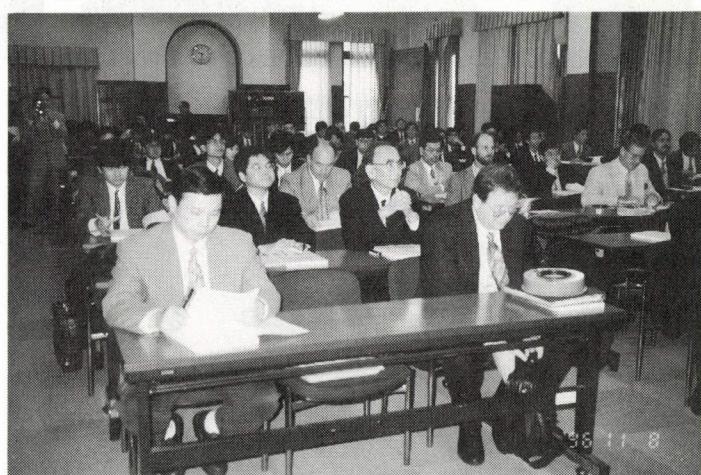
その後、会場を模様替えして簡単な懇親会が催され、シンポジウム参加者の約半数が出席した。

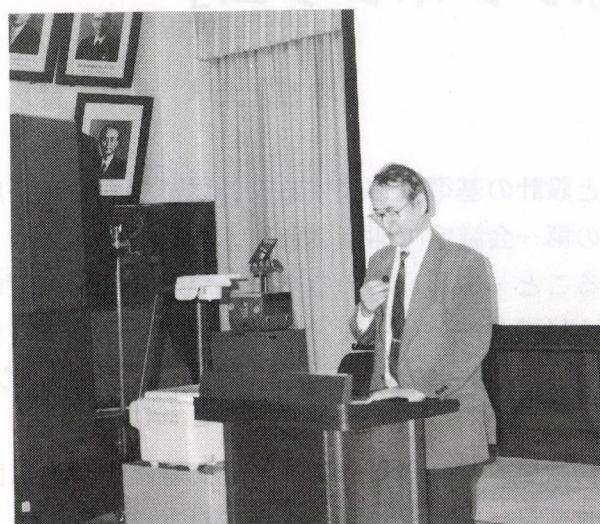
冒頭、国際ジオシンセティックス学会会長の Jones 氏が、日本支部がこのような機会を作ってくれたことへの感謝の意に加えて、学会発足以来日本支部は福岡先生・赤木先生・龍岡先生と3人の理事を出して学会発展のリーダーとして活躍してきたこと、また、法人会員も22社（国別第一位）が加入し、経済的にも大きく貢献していることへの感謝の言葉があった。それ以上のスピーチはなく、各人が文字通り懇親し、20時までに解散した。

なお、論文集は280ページに及ぶソフトカバーのもので、各講師が最新の情報をまとめたものとなっている。残部に制限があるので、必要な方は至急事務局まで連絡を戴きたい。

最後に、本シンポジウムの開催に際し、講師との連絡や会場準備に尽力された東京大学の小高・鳥光の両氏に心よりお礼申し上げる次第である。

セッション	司会	講演者
I	赤木俊允	古関潤一 L. E. Wichter C. J. F. P. Rimoldi F. P. Jones R. J. Bathurst
II	P. E. Stevenson (U. S. A)	J. P. Gourc J. T. H. Wu 宮武裕昭 C. C. Huang W. Voskamp
	古関潤一	
III	龍岡文夫	R. K. Rowe D. Leshchinsky H. I. Ling





開催挨拶－龍岡教授



歓談するジョーンズIGS会長と  
福岡日本支部長



懇談会で挨拶するジョーンズIGS会長  
と赤木教授



左からグルク理事、ロウ前会長、  
バタースト副会長